

本と劇中で思索し、生きたワイルド — 吸収と消化そして表現へ

Thomas Wright, *Oscar's Books* (London: Vintage, 2009)

Kerry Powell, *Acting Wilde: Victorian Sexuality, Theatre, and Oscar Wilde* (New York: Cambridge UP, 2009)

宮田理奈子

ワイルドは本と劇の中で思索し、生きた。自身は勤勉な職業作家であったものの、ワイルドの一貫した姿勢のひとつとしてヴィクトリア朝のミドル・クラス的な価値観への侮蔑があることは周知の事実である。こういったワイルドの姿勢は、いかに形成され、表現されたのか。読書体験、当時のフェミニズム運動という観点からこの問題に新たな光を照らす2冊、*Death in Genoa*の作者でもあるトーマス・ライト氏の(Thomas Wright) *Oscar's Books* (初版2008年、翌年ペーパーバック化)と、2009年10月に上梓されたケリー・パウエル氏(Kerry Powell)の*Acting Wilde: Victorian Sexuality, Theatre, and Oscar Wilde*—を紹介したい。

まず、読み手としてのワイルドに着目している初めてのワイルド伝、*Oscar's Books*において、ライト氏もワイルドがミドル・クラス的な美德への挑戦を喜びとし、英国のブルジョアジーが彼にとってのベット・ノワール(bête noire)であった点を詳細に説明している。

ワイルドを追ってモードレン・カレッジで学び、ワイルドが読んだ書物をつぶさに研究しているライト氏は、ワイルドの幼少期からの読書体験をもとに、当時の、少なくともヴィクトリア朝英国のミドル・クラスの価値観からすると奇特な環境で育ったことを指摘している。ワイルドはボヘミアン的な環境で育ち、いわゆる“道徳的にためになる(improving)”な書物には目を通さなかったというのである。ワイルドの両親は子供に自由に本を読ませており、ゴシック小説などに触れた読書体験は、19世紀の英国、アイルランドの作家たちのものに近く、特

にシェリー、マチュラン、ロセッティ (Shelley, Maturin, Rosetti) に傾倒したが、何より特筆すべきはこれらの作家たちもミドル・クラス的な環境では育っていないということである。ワイルドが強く影響を受けたロセッティは、ボヘミアンの、非イングランド的な環境で育っており、ワイルドに近かったという。氏が指摘しているように、ワイルドにとって名実ともに本は“友達”であり、生涯のロマンスであったが、その基盤には幼少期の両親の豊かな蔵書、自由な読書体験があったのである。アイルランド口承文学に触れていたこともありワイルドは独特の価値観を養い、抽象概念ではなく物語形式で直感的にものごとを考えられるようになった。ポトラ時代には本に散財、学校教育に嫌気がさしますます本の中で生きるようになったワイルドにとって、読書とはほかの生徒から賞賛され、尊敬されるという社会的権力と名声の源であり、彼に優越感や特別性を与えるものとなったという。バルザックの *Lost illusions, A Harlot High and Low*、そしてスタンダールの *Scarlet and Black* から強い影響を受け、特にバルザックからは、文学界や貴族社会の中で成功する方法と、本から優れた人格を形成するための方法を学んだというが、この頃からワイルドがいわゆる当時の英国人の“ミドル・クラス的な”考えから逸脱していたということが顕著に示されていると同時に、後の、文学的才能を活かしメディアを戦略的に利用し社交界の中で自己を確立するワイルドの原型が読み取れる。氏によれば、ワイルドはニューマンの理想に傾倒していたオックスフォード大学在学時代、隠れ“ガリ勉”であった。本人はいたって勤勉でミドル・クラス的な努力家でありながら、ミドル・クラス的な“勤勉”への軽蔑を演じていたアンヴィヴァレントなワイルド像が、書物リストからも浮かび上がるのである。ワイルドは独特の形で、文学作品を生きる上でのマニュアルとしていたというが、作品において剽窃も多いと批判されることが多い。氏は、これは読み書き間に密接な関係があったためであると指摘している。ワイルドは“読まずには書けない”タイプの作家で、ワイルドによれば真の天才というのは決してオリジナルではありえず、ブロンテ姉妹のようにオリジナルな作家は天才とは認めなかったという。ワイルド自体は剽窃を通じて自らの天才性を表現していたといえるであろう。書物のページの角を破って口に丸めて味わうこともあったというワイルドにとって、書物は名実ともに彼の思考と人生であったが、一貫して自らが認めた書物の中からのみ学び、消化し、実践していたという点においても、ワイルドがミドル・クラス、ブルジョアジーへの嫌悪をつのらせていった姿を容易に想像できると同時に、読書を実生活と自らの生産活動に直接つなげているという点で、商業作家として成功する要因を見ることができると

ある。

次に、*Acting Wilde* に移る。ワイルド自身の戦略的な戯曲化の概念を再構築することを試みる本書において、ワイルドの革新的な貢献はジェンダーや個人のアイデンティティ、人生を演じられるものと考えただけでなく、それらを受け止め、名実ともに計算つくされた自己形成戦略を採択した点にあると指摘するパウエル氏は、ワイルドの劇を理解するにはヴィクトリア後期フェミニスト運動の理解が必要であり、フェミニストを突き動かしていた極端な思想とワイルド劇は切り離せないものであると述べている。

ここでは主に Chapter3 に着目したい。パウエル氏によるとワイルドにとって最も重要なテーマは、男、女であることの意味とは、であった。ワイルドは過激なフェミニストを嫌悪していたが、ジェンダーの概念がフィクションであるという認識においては当時のフェミニストと共通していたと氏は指摘する。ワイルドの喜劇におけるピューリタン女性は、草稿を重ねるごとに、ジョセフィーヌ・バトラー (Josephine Butler)、ミリセント・フォーセット (Millicent Fawcett) といった活動家を思わせるような厳しいピューリタン女性ではなく、やわらかく、丸くなっており、これは、観客を意識していたからであるのはもちろん、自らの人生を救おうとしていたからでもあるという。*An Ideal Husband* はワイルド自身の一恐喝者と、ピューリタンのフェミニズムという新しいイデオロギーに苦しめられる一物語であった。この劇の執筆当時、ワイルド自身も、チーヴリー夫人に恐喝されるロバート・チルターンのように、同性愛で恐喝者たちに脅されていた。ワイルドは自身とチルターン両方を、劇中で救おうとしていたというのである。また、パウエルは金のために自らを売ったチルターンはコンテクストの中で、“男娼”とも解釈できると指摘する。チーヴリー夫人は、価格が妥当であれば、誰でも売春をするのだと解釈できるとパウエルは述べているが、ワイルドは男娼と、金のために自らの良心を売り渡す紳士に同じ本質を見ているのではないか。この点においても、ミドル・クラスへの揶揄、また、同属嫌悪とも考えられるであろう。社会的地位を得るまでは良心を売り渡し、手段を選ばず、その後に偽善的に理想を説くものに対して、警鐘を鳴らしていると同時に、ワイルド自身の自己矛盾、不正は働かずとも gross indecency という罪を犯しながら職業作家として自らの思考を売り生計をたてているという事実、実際に恐喝にあったという事実、複雑に絡み合った網の中で救われたいという叫びが聞こえてくるようである。男娼であれ、プロフェッショナルな作家であれ、何らかの形で自らを“売る”しかなかったのであるから。過ちを犯したチルターンを、男

を、夫人はパウエル氏が指摘しているように、当初は当時のフェミニスト同様、理想化、神格化する。ゆえに結婚が一方通行 (one-sided institution) になり、完全な男らしさを求められる男にとって結婚は絶望的で、チルターンはますます追い詰められる。ここでチルターン夫人の問題は女性一般の問題とされていると指摘されているが、ワイルド自身の、ミドル・クラス的な結婚への揶揄もこめられているとも考えられるであろう。プラトンの恋愛を模倣し、“Love that dare not speak its name” への理解を求めていたワイルドにとって、男性を理想化することの馬鹿馬鹿しさに気づいている、メイベルのように機知に富み、理解のある女性の存在は不可欠であったと考えられるのである。最後にチルターン夫人は潔癖なピューリタンの思考を広げ、過ちを犯した夫を赦し、再び愛する。“good woman” は、“fallen man” を赦し、愛することができるというのが、この劇のワイルドの最大の核心であった。ワイルドは伝統的なジェンダーのアイデンティティに頼らずに、新しい“男らしさ”の定義への抵抗を試みる方法を求めて書き直しを重ねたが、チーヴリーも不在で、結局メロドラマ的な結末に落ち着く。この失敗は、伝統的なジェンダーの概念から最終的には逸脱できなかった点にあると本書では指摘されている。書き直しを重ねるに連れ、“ワイルド的”ではなく、ヴィクトリア朝的になってしまったというのである。これは、先に述べたライト氏の、真の天才はオリジナルではありえず、伝統の中で生きるというワイルドの主張と整合しているようにも思えるが、自らの物語であったと考えれば、無難な形で終わらせるしかできず、ここにワイルドの限界があったのであろう。ワイルド自身はヴィクトリア朝やミドル・クラス的な価値観を揶揄しながらも、常に彼らを意識して、自らを商品として流通させ続けた作家なのであるから。

ゆえに、この劇の最後が“失敗”だからこそ透けて見えるものがあるのではないか。ワイルドが、ミドル・クラス的な価値観を侮蔑しながら、押しつぶされそうになりもがき苦しんでいた、姿。自らの人生と作品を上手に区別できず、演じることができなくなってきた、そのほころび。そして、欠点だらけの自らを母のような愛で包み、赦してほしいという、願望。

ワイルド自身は、パウエル氏の指摘のとおり彼を脅す男娼と、また、ピューリタンのフェミニズム運動に基づく、当初は若い女性や娼婦を守るために制定された The Criminal Law Amendment Act, 1885 の犠牲になった。このワイルド裁判についてであるが、ライト氏は、ワイルドの過ちは何より侯爵を訴えたことであると、パウエル氏は、ワイルド裁判は性裁判 (sex trial) に他ならなかったと述べている。ワイルドは常にマイノリティとして、文才とウィットを通じて社会に

挑戦を試み、商業作家としての成功をおさめた。しかしこの挑戦を一般社会と社交界の世界を超えて法廷に持ち込んだ段階で、また、外国人の売れっ子作家が英国の貴族を訴えるという、最初から敗北が透けてみえる勝てぬ戦いに挑んだ段階で、パウエルによるところの社会に用意された哀しい道化の役割を、自ら引き受けたことになる。メディアを利用し利用され、人脈作りに長け、計算しつくし、実人生をまさに演じたワイルド。一般社会において通用する戦略も、当然ながら法廷では通用しない。自らの感性にあう書物を選択し、それらをお手本にして生きたワイルドにとって、貴族を訴える失敗するというシナリオはなかった。ポートルや、オックスフォードとは違い、活字や本、自らの話術と知性をうりに、法廷でもヒーローとなるなどということはあり得ず、“Love that dare not speak its name” のスピーチも、徒勞に終わり、ワイルドは全てを疑う中年の時期にさしかかり、作家人生における最大の挫折を体験することになるのである。

ブルジョアジーに対する嫌悪、ミドル・クラスへの侮蔑もワイルドの読書体験を考えると、自らの存在の正当化のためであったとも考えられる。天才的文才と秀でた知性ではどうにもならない勢力を前に、そして、世の中は天才によってではなくて凡人によって動かされるのであるという現実を前に敗北を受け入れられないのであれば、それを嫌悪するしかない。この、ワイルド自身の脆弱さ、立場の曖昧性、また、劇がメロドラマ的に終わり、“失敗”しているからこそ、現代の読者にとって身近なものとして、光り輝くとも考えられるのである。

このようにワイルドは実人生とフィクションの間を行き来し、パウエル氏によれば、最後には法廷という場で自らの作品における性の役者 (sexual actor) となり、コントロール不能な領域にまで足を踏み入れ、破滅した。ワイルドの人生のドラマはポスト・モダンの実行演技の社会劇 (social drama) であったというのである。

ライト氏によれば、牢獄での読書が制限されたワイルドは、その中で本を薬とし、読書に人生の導きと癒しを見出し、出獄後は慰めのための読書をするようになったという。2年間の牢獄生活において本が自由に読めなかった代償は出獄後の創作という点においてあまりに大きかったが、ワイルドは最後まで、本と活字とともに生きたのである。

このように活字と実人生を行き来し、双方の世界で生き、演じたワイルド像に新たな光が照らされることにより、芸術と法、表現と実人生の問題が浮き彫りになる。資本主義社会においては誰もが自らを何らかの形で商品として流通させることが求められ、また、現代では紙媒体に限らず誰もが活字をもって社会に対し

て表現できる機会が増え、表現と実人生の問題はより一般化していくであろう。興味の細分化が進み、インターネットにより多くの情報に触れられる現代、ワイルドのような天才でなくとも表現と実人生の問題は課題となっている。これら2冊は研究者にとって、ワイルド研究を通じて混沌とした現代社会にいかなる貢献ができるかを新たに問いかけるとともに、自身とワイルドの関係を生き活きと記述しているライト氏の書は読み物としても読者を魅了するものであり、より多くの読者が新たなワイルドの魅力に触れ、まさに“毒される”ことができるものであるといえよう。

引用・主要参考文献

Powell, Kerry. *Acting Wilde: Victorian Sexuality, Theatre, and Oscar Wilde*. (New York: Cambridge UP, 2009).

Wright, Thomas. *Oscar's Books*. (London: Vintage, 2009).